



シンポジウムでは、松本理寿輝氏(まちの保育園・こども園代表 J・R・E A代表 まちの研究所株式会社代表取締役)、馬場正尊氏(公共R不動産プロデューサー)、島谷千春(前教育長によるオープンダイアログが行われました)。「加賀市の保育・教育×まちづくりの未来」をテーマにしたダイアログの一場面をご紹介します。

加賀市の保育・教育×まちづくりの未来 地域における保育園の役割とは？

「保育園では、先生たちが子どもに『どう思う?』と問いかけることを大切にしており、それが子どもたちの想像力や考える力を育てていることに感動しました。」
加賀市では、そうした工夫を小中学校にも広げようと、空き教室を使って子どもたちが自由に学べる場所をつくるプロジェクトが進んでいます。子どもがのびのびと自分らしく学ぶためには、空間的な整備(ハード)と大人や地域の関わり(ソフト)の両方が大切です。「遊び」こそが創造の原点であり、これからの仕事の在り方にも通じるものです。たとえば、道草をしたくなるような通学路を、子どもや保護者と一緒になって考えることも創造的なまちづくりの一步となります。正しい答えが一つとは限らない今の時代、遊び心を持って、失敗しながら試行錯誤することが大事です。

今年度の公立保育園のテーマは「加賀のまち」

令和6年度は「自然」だったテーマを令和7年度は「加賀のまち」と設定して進めていくこととなりました。

加賀市に住んでいる大人が知っている、加賀のまちは、豊かな自然に包まれ、歴史や伝統文化が大切に受け継がれ、あたたかいコミュニティを持つ地域であり、もちろんそれは特別な魅力だと思います。ただ、その一方で、子どもたちが知っている、そしてこれから出会う「加賀のまち」はそれとは違っていて、私たち大人が加賀市の良さについて、気づき直すきっかけとなるかもしれません。

子どもたちは園での学びの中で「加賀のまち」にどのような出会い、感じ、表現し、私たち大人に伝えてくれるのか? それを楽しみながら、子どもたちと一緒に学び、気づいていくプロセスを大切に2年目の歩みを進めていきたいと思います。

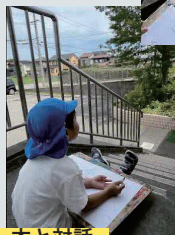


木を見つめる

木ってどんなカタチがある? 枝や葉っぱは? 木の模様やフォルム、バランスを含めて子どもたちはよく見ていきます。



友だちと対話



木と対話

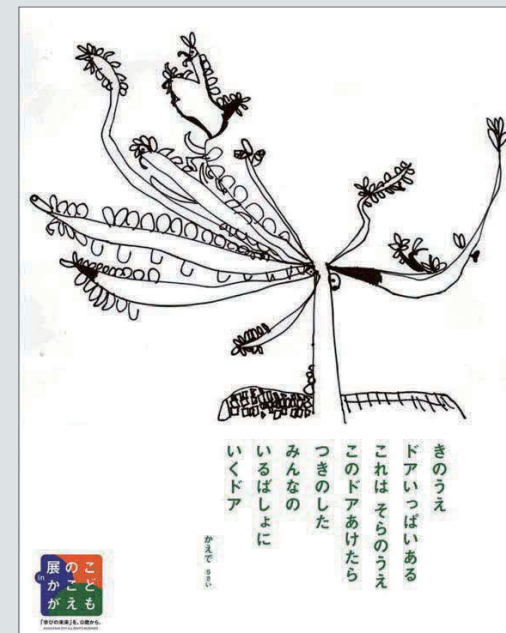


自分との対話

木を様々な方向から見て木と対話する。お友だちの描く姿、言葉、描いたものに興味を持って友だち、そして自分とも対話する。それぞれの絵にもつながりが生まれていました。

こどものこえ - 学びのエピソード -

日常の中で「根っこ」の存在を意識的に捉え、話してくれる子どもたち。目に見える木には、目に見えない根っこがどのように繋がっているか考えてみよう、園舎前の大きな木を描いてみました。



木を描く



たっぷり時間をかけて、いねいに幹の模様をみて描いていました。葉っぱも一枚一枚違っていることに気づき特徴を捉えています。

目に見える「木」をよく見て描いたことで、目に見えない「木の下の世界」もよく想像するようになりました。木の下を描く活動では、どの子も迷いなく伸びやかに木の下を表現していた姿からは「目に見えているのはほんの一部だよ」と子どもたちから教わるような気持ちでした。目に見えないもの、見えにくいものの大切さや面白さを私たち大人に話してくれているかのようです。この春、園にやってきたみかんの木を通して、子どもたちはどんな世界を広げ、その面白さを私たち大人に伝えてくれるのでしょうか。



▲ 加賀市
子育て支援課
Instagram